

百人、千人の一人に

—教育の中における障害児差別について—



福井達雨

合格通知をとり消して

止揚学園では、毎年十一月に、就職試験をする。

試験課題に、便所掃除、バレーボール、全職員での面接、遠足等があり、皆で採点をして、その最高点から、合格が決定されていく。

採点風景が、また大変である。

「Aさんは、ハンサムやったなあ、私、シビレタわ」
保母たちが、ワイワイと騒ぎだす。

「コラ、そんなつまらん条件で、良い点を入れたらあかんど、人間は、顔やなくて心や」

「わかってますわ。でも、やっぱり、私たちは、うら若き女

性ですもの、ハンサムな人に憧れますわ。第一、止揚学園の男子職員は怪獣ばかりですもの」

「ナニオ、こんな男前をまえにして」
皆が、ワッと笑いだす。

止揚学園一のデブの東郷先生が、

「Bさんは、遠足の時、子どもたちに何も食べさせず、自分ばかりオニギリを食べたはった。五つも、ペロッと食べはった。ああゆう人は、子どものことを考えない、自己本位の人と違うかなあ」

「あ」
といだした。

「君か五つも六つも、オニギリを食べたと違うか」

「ソナナ、失礼ですわ。私でも、花恥かしき乙女です。だから、

こんなにやせてスマートですね」

ワイワイガヤガヤ、こうして職員が決定されていく。

止揚学園は、人間に恵まれており、職員数は、法定数の三倍、受験率は、いつも十倍以上になる。

チームワークがあり、人間関係のよい施設は、職員の勤務年数が長くなり、必然的に、職員数が増加していくものである。

施設の職員不足問題は、一つは行政問題の解決であり、もう一つは、施設の人間関係の暗さの解決であり、他に、日本人の連帯感の促進であろう。

この三つの解決を考えなければ、施設職員は、いつも不足するであろう。

さて、十二月に入ると、合格通知をおくる。女子合格者の何人かに問題がおきる。それは、両親が、この仕事をするに、反対するのである。

昨年も、合格者の母親から、電話がかかってきた。

「私は、そちらの就職試験に合格したAの母親です。

娘が、この仕事をするに反対ですから、合格通知をとり消してください。娘は、反対してもいくといっています、親というものは不幸なものです。こんな親のことを聞かない、親不孝な娘を産んだおぼえがありません」

「そんなことは、親不孝なことではありませんよ」

「なんといわれても、娘を大学までだしたのは、こんな仕事をしてもらうためではありませんでした。

もっと楽な幼稚園か学校の先生になってほしいです。

こんな仕事に入れば、結婚もおくれるし、大変だし、可哀想で見ていられません」

「そんなことはありませんよ。ここでは、保母たちは、ちゃんと結婚しますし、あなたは、間違った施設観をお持ちではないでしょうか」

「うそでしょう。テレビや新聞に、施設の大変なことが、いろいろと出ていますよ」

「テレビや新聞は、ある主張の中で、一方的な報道をします。あれは施設の一面で、反対に職員が多く、笑いが一杯ある施設もあります。でも、そんな施設は、『画にならない』、人の心にうったえられない」と、なかなか、取材してくださいらないのです」

「信じられませんね。私たちは反対していますから、合格通知をとり消してください」

電話が、ガチャンとぎれた。

ボランテアをさせました

先日、私は、ヨーロッパに講演旅行をした。講演後、一人の人がこんなことをいわれた。

「私は、自分の子どもたちを、結婚する前に、一年間、施設でボランテアをさせました」

「どうしてですか」

とたずねると、

「私は、幼児の時から障害を持った人たちを幸福にするのは、自分たちの義務であり、連帯であることを子どもたちに教え、行動させてきました。」

しかし、私の孫たちには、子どもたちがそれを教えるべきです。そこで、結婚前一年間、施設でボランテアをさせ、障害を持った人たちのことを勉強させたのです」

「そうですか、この国では、このような考え方を持っている人たちがたくさんいるんですか」

「私の仲間も、ほとんど、そう考えていますね」

私は、心がホノボノとする思いだった。

世界のために二人がある

日本人の間親、教育親は、自分、夫婦、子どもさえよければという「二人のために世界がある」という考え方が多い。

もし、合格者の両親たちが、

「この仕事は、素晴らしい仕事だ、がんばってやれ。私たちも、君と共に歩むよ」

と一言いつてくださったら、娘さんは、自分の両親に、どれだけ誇りを感じたであろうか。

しかし、日本の親の多くは、子どもに、要領よくするく、安易に安全に、自己本位に生きることが教えるが、真理にぶつかって時、どんな困難があっても、勇気を持ち、汗して、ぶつかって行く姿勢、自分を捨て他者と共に歩む心を、幼児期から教えない。

しかし、ヨーロッパでは、「世界のために二人がある」自己、子ども、家庭から社会を豊かにしていこうという心が、家庭の中で育っていることを深く感じる。

百人 千人の一人に

日本人は、自分の内側にむける「個人のエゴな道徳」は持っているが、自分が外側にむかって立ち向かう「個の連帯感」を持

つ人は少ない。

「日本人のツメタサ」とは、個の連帯感の少なさから生れていくように思う。

真の心とか、連帯は、幼児期からの家庭教育の中で育つものが多い。

日本では、私たちの現場や、家庭以外の場で、このような問題が真剣に語り合われる。その熱意ある話をしていた人たちが、家庭に帰ると、先ほどとは正反対な発言や行動を平気でし、

「エライ人になりなさい。勉強して有名な大学に入り、大会社に勤め、小市民的な幸せを持った家庭をつくりなさい。

結婚する時は、苦勞をしない人を選びなさい。たよりになるのは、結局、お金と自分だけだから」

と、自分の子どもに語るのである。

本当に大切なものが、日本では、家庭で育つことが少ないのに、社会では、それらが叫ばれる。

この、二重構造性の中で、教育や、社会福祉が、「たて前」や、「かけ声」だけの頭でっかちなものになり、「本質」が忘れ去られた、足が地面につかないものになってしまう。

そして、生命をおかされている人たちが、おき去りにされた、大切なもの不在の方向が進んでいく。

先進社会福祉、教育国家と、そうでない国家との相違は、ここにあると思う。

日本は、行政、建物、設備は、いろいろな問題はあるにしても、先進国とくらべ、それほど大きな相違はあると思えない。

しかし、大きな相違は、障害を持っていない人たちの側の方、行動の相違である。

先進国の人たちは、障害を持った人たちに、強い連帯感と心を持っていて、日本人は、（自分には関係がない）と、ほとんど無関心である。

この差が、社会福祉、教育国家か、そうでないかの違いであるように、私は思えてならないのである。

社会福祉問題、障害児問題等は、現場の私たちと共に、地域社会の百人、千人の人たちが、いろいろな立場、場で、連帯を持って歩んでくださる問題である。

しかし、現実には、百人、千人の人たちは、知らない顔をし、素通りしていき、少数の人たちに、地球よりも重たいほど大切な生命を、かつがせる。この重たい生命を、少数の人たちでかついだら、どうなるであろうか。汗が流れ目に入り、足が、ガタガタして疲れ果ててしまうのは、当り前である。

もし、百人、千人の人たちが、共に、この重たい生命をかつい

でくださったら、私たちの少数グループは、こんなに疲れなくともよいのではないだろうか。

私は、この生命の重さで疲れ果てながら、幼児教育の大切さを、家庭教育の大切さを、強く感じるのである。

私たち大人は、真の連帯感を持つことは、ほとんど不可能であり、期待は持てないのである。

しかし、幼児には、それが期待できる。

他者を、生命を、目に見えないものを、大切にする幼児教育が、社会、家庭、幼稚園、保育園で育ってくれたら、いつかは、この障害児や、重い知恵おくれの子どもたちが、心から笑いを持ち、歩む社会が育つであろう。

百人、千人の一人に、皆様がなっていたきたい。

このことを、両親、幼稚園、保育園の皆様に、心からお願いたいのである。
(止揚学園)

日本保育学会第28回大会のお知らせ

日程 昭和50年5月17(土)・18日(日)

会場 玉川大学・東京都町田市玉川学園6-1-1

参加費 正・臨時会員800円 学生会員500円

当日会場にて受付けます

連絡先 玉川大学内日本保育学会第28回準備委員会

(電) 0427-32-9111(代)

第5回みどり会夏季研修会予告

期日 第一部 8月18日(月) 19日(火)
第二部 8月19日(火) 20日(水)
場所 福島県飯坂温泉
講師 津守真先生 本田和子先生 平井信義先生
藤永保先生(交渉中) 大場牧夫先生

詳細は5月号掲載

幼児の教育 第四十七巻 第四号

四月号 ◎ 定価二〇〇円

昭和五十年三月二十五日印刷

昭和五十年四月 一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
フレーベル館にお願いいたします